

ふれあい雪谷

平成19年
もみじ号



(上池上 海老澤 彰江さんの作品)

タイ象「はな子」との再会

今年の5月、たまたま入手したタウン・コミュニケーション誌に「井の頭自然文化園で、今年59歳になるアジア象のはな子が静かに余生を送っている」との記事が載っていた。ご年配の方はご存知のように、太平洋戦争末期に、空襲で猛獣が街に逃げ出すと危険な為、象・ライオン・ヒョウ・熊など殆ど猛獣が殺処分され、動物園にはスター的存在の動物がいなくなった。

この為、戦後全国の子供達から、是非象が見たいとの声上がり、これに呼応して、昭和24年親日的なタイ王室から2歳の象(タイ名:ガチャ子)が贈られた。全国的に大変な人気者となり、新聞社の主催で日本名が募集され、「はな子」と決まった。

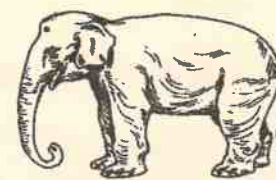
この舞台裏では、戦前から三井グループのタイ国関連部門を担当していた亡父が、親しくしていたタイ国政財界の有力者を通じてタイ王室に要請した経緯もあり、上野動物園への贈呈式には、亡父と共に私も参列した。

半世紀以上経った現在では想像できないほどの人気者となり、上野動物園に来られない子供たちの為に移動動物園という形で各地を訪れることもあった。

その後、井の頭自然文化園に移ったことはまったく知らず、人間の還暦に相当する年まで長生きしているとのタウン誌の記事にはびっくりした。

早速、井の頭自然文化園に電話したところ、7月21日に、文化園が所蔵する武蔵野市の市政60周年に合わせた市長の感謝状と子供たちによる食物の贈呈式が行われるとの事で、当日家内とともに文化園を訪れた。

花子は寄る年波には争えず、動作も鈍く、体毛が抜け落ち、ところどころ地肌が露出して老境にあることは一目瞭然だったが、見物客を惹きつけてかホースを鼻に巻きつけて水播きしたり、花で地面を掃いたりして愛嬌を振りまいている姿に涙が出そうになった。



象は本来群れをなして行動する動物であり、たった一頭で、しかも大都会に60年も生きている間にはかなりストレスも溜まっていることと思う。

日本には、はな子よりも長寿の象が2頭いるとのことであり、はな子もまだ長生きする可能性はあるが、これからは時々様子を見に行くつもりでいる。

文化園は吉祥寺駅から徒歩10分位の近場にあるので雪谷在住の皆様も機会があれば、是非お訪ねください。

(東雪 宮原 稔夫)

【編集後記】

今号には二稿の自発的投稿があり、編集委員一同喜んでおります。「ふれあい雪谷」を一人でも多くの人に読んでいただければ、又気軽に持ち帰り頂けるようにするにはどうしたらよいか、色々議論をかわしております。何かアイデアがあれば、ご一報いただければ幸いです。又投稿もお待ちしております。

(東雪 松尾 勝子)

〔発行〕わがまち大田雪谷地区推進委員会
〔編集〕ふれあい雪谷編集委員会
〔連絡先〕雪谷特別出張所
大田区雪谷四三三
電話三七二九一五
〔発行日〕平成十九年十月一日
通巻第六十八号

サークル紹介 37 水彩画・パステル画教室

毎月第一・第三金曜日、午前10時半から12時半まで、洗足池図書館2階多目的教室にて、嶋田講師を迎えて、会員十二名にてご指導をいただいております。

心の和む洗足池のほとり、毎日の仕事、そして家庭の雑務から少しの間離れて、和気あいあいと皆様に、大いに楽しみながら、短いひと時を過ごしています。



水彩画は読者の皆様よくお分りでしょう。パステル画は、筆などは使用せず、直接手に持って自由に書きますので、初心者の方手軽に取り組めます。画材が少なく、スケッチブック一冊で書け無心に集中することで充実感があり、同好の方からも学ぶこともできます。皆様と一緒には有意義なときを過ごしてみませんか。

(小池 山下 智香子)

送り火

永田 秋夫

読み終へし

玉碎戦記

蚯蚓鳴く

煙草吸ふ

夫に蔭やる

秋日傘

私の健康法29 洗足池と私

春は桜が咲き誇り、大勢の花見客で賑わい梅雨の季節には紫陽花が美しく咲き、行く人々を心豊かにさせてくれる。

古稀を迎えた私は週に四、五回洗足池図書館に通い、読書に夢中である。一回に五冊位借り、年間百冊の読破を目指している。

三時間位、本を読みふけた後、洗足池の周りを散歩する。池面には鯉がパクパクと口をあけ、小鴨がすいすいと泳いでいる。

日蓮大聖人が池上に行く途中足を洗ったという史跡や、勝海舟が西郷隆盛と会ったという歴史的な地でもある。

サラリーマン時代、子供三人を夏休みになるとボートに乗せた懐



つかしい想い出にふけりながら池を眺めていると心洗われる。ボケ防止のため読書にふれ、池の周りを一周すると健康にも良い。

私は家から十分位の所に、風光明媚な池があることに幸せを感じている。

(東中 南 健治郎)

ホームページ

<http://www.city.ota.tokyo.jp/nishi/yukigaya/index.htm>

自治会は地域住民のためのもの

1. 自治会とは

一定の地域区画において、居住ないし営業する全ての世帯と事業所で組織され、そこで生ずる問題への対処を通して地域の共同管理にあたる、住民自治組織と書かれている。

2. 9自治会とそれらで構成される雪谷自治会連合会

雪谷地区では、笹丸、雪谷石川台、希望ヶ丘、南雪谷、東雪谷、東雪、池の台、小池、上池上の9自治会が、地域の特性や環境を活かしつつ、雪谷特別出張所、警察署、消防署、各行政機関と、関連の協会、協議会等数多くの団体と連携を持ちながら、独自のまちづくり活動をしている。雪谷地区共同の問題解決には雪谷自治会連合会が当たる。

3. 自治会運営上の悩み

- (1) 会員の加入対策：アパートの住人は加入者が少ない。
- (2) 個人情報保護のため、住民の状況の把握が困難。

4. 災害発生時の自治会活動

最近マスコミ等から、災害発生時に自治会の活動が必要と大いに頼られ、書き立てられているが、災害発生時点では全住民が被災者であり、混乱の最中から全住民と自治会が力を出し合うためには、地域住民の適切な情報の把握が不可欠。自治会はこのような事態発生を想定し、行事、活動を通して住民とのコミュニケーションを図っている。

5. 南雪谷自治会行事の一部紹介

- (1) 新年会：自治会館で、女性部手作りの料理で。
- (2) お花見：桜公園で、高齢者、一人暮らしの方、身体の不自由な方を招待。雪中生徒、民生委員、地元ボランティア遊の会等協力。
- (3) 夏休み子供映画会：自治会館、クレヨンしんちゃん等。
- (4) 夏休みラジオ体操：6時20分から雪谷小学校で。
- (5) 雪ヶ谷八幡神社祭礼：町の輪(和)作りと捉えて参加。子供神輿2基、大太鼓山車1基。
- (6) 敬老の集い：地域在住の75歳以上の高齢者を招待。民生委員協力。災害時対策の一環として、手上げ方式で災害時要援護者申告をまとめている。

住民一人一人が智慧を出し合って、自治会組織により、住みよい町、安心のまちづくりをしようではありませんか。

(南雪谷 内山 弘)

雪谷特別出張所からのお知らせ

ご自分の住所がどの自治会の管轄にあっているのかをお知りになりたい方は、雪谷特別出張所までお電話ください。

Tel 3729-5117

町の樹木を残そう

地球の温暖化が問題視されている今日、私たちが協力しなければならぬ時代に入ったと思う。さてその協力できることは、身近なわが周りの緑を残すこともひとつの方法であろう。何十年となく育てられた樹木が個人住宅、マンションの建築の中でおしげもなく切り捨てられていくのが実態だ。

樹木は大気の清浄にどれだけ尽くしたことであろう。樹木は一日にしてならず。愛情と手入れによってどれだけ人の心を和ませ大気の汚染防止に役にたったことであろう。切らずに是非残してほしいものである。

どうしても建築に支障ならば、区で引き取りを実施し、必要な人には運搬費等を支払えば分けてくれる制度が実施されています。私は十年程前から区の議員にこの制度の実現を申し入れていました。この方法が採用されて喜びに耐えません。

この住宅街を緑の町とし、現在人々のために、又将来の子供達のために新鮮な酸素を胸いっぱい吸ってもらい、丈夫で情緒豊かな成長を望みたいものだ。ちなみに私の庭には、終戦後買い集めた樹木が今うっそうと繁り、四季折々、花も実も町行く人々に楽しみを与えている様に思っている。

是非、緑を残そう。鳥さえずる美しい町に。

(池の台 柏 頼信)



美しい環境づくり 25

今、環境問題は人類にとって地球規模で取り組むべき最重要課題である。産業革命以降、開発と増産により多くの国が近代化への道をたどってきた結果、確かに生活は豊かになり、便利な暮らしを手に入れたといえよう。

しかし、一方で乱開発と大量生産が環境を犠牲にしたことも事実である。二酸化炭素(CO2)の大量排出が原因とされる地球温暖化現象は、年々土地の砂漠化を促進させ、海面水域を上昇させている。もう地球が悲鳴をあげている極限の状態まで達しているのである。

では、我々が市民生活の中でこの問題を少しでも改善させるために何ができるのであろうか？

日本では二酸化炭素の排出量の約半分が家庭から出されることから、電気・ガス・水道のより一層の省エネを強化する必要がある。また、移動手段は公共交通機関を利用する、使い捨てるような消耗品・雑貨類の購入を控えることも環境には有益なのである。日常生活で当たり前のことを少し意識するだけで、環境の改善に大きく寄与することと、今後の地球の将来が我々市民の手に委ねられていることの責任の重さを強く受け止める必要があると考える。

(石川台 U・N)

R100
石川台・N地区100周年記念事業

自治会リレー随筆

母の老い

私の母は、大正13年9月、秋祭りの太鼓が鳴り響くときに生まれたそうです。若いときの母は、父とともに重機の会社を営み、気弱な父に代わって、度胸の良さやパワフルな働き振りで采配をふるい、全てが母中心でした。

そんな母が58歳のとき旅先で倒れ、脳梗塞で左半身不随となりました。病氣は母の人生を変えました。辛いリハビリを頑張り、杖をついて歩けるまで回復すると、気丈な母は「金庫番」を死守し、それが生きがいにもなっていたと思います。物忘れが多くなり、書くことも困難になって金庫番を「辞める」と言ったのは、2年前の80歳のときです。

それからは長年の肩の荷を降ろしたかのようにけんがとれ、穏やかになり、お財布を持たない生活に入りました。それから、「老い」が見えるようになり、元気で明るく「二度わらし」を楽しんでいるかのようです。食欲旺盛な母の内臓が「健康優良」なのは義姉の手料理がおいしいからで、母は幸せ者です。

現在、〈要介護 4〉の母はトイレ介助が必要で、夜中にも何度も起こされ熟睡もままならない日々の介護の現実は大変なものです。その介護をいつも看てくださる義姉に少しでも休養がとれるように、月に2度福島に帰省し、私も少しばかりの介護を担うことにしました。家族の協力にも感謝し、これからも母と姉の笑顔を支えたいと思います。

(笹丸 斉藤 富美子)



母校の思い出 30

小学校の思い出・清明学園

先日、荏原病院前の「藪そば」でふと手にした「ふれあい雪谷」に藪のご主人千代さんが池雪の思い出を書かれたのを読みました。雪谷には私立清明学園があり、我々兄弟が数少ない雪谷在住の卒業生で、しかも70歳代の生き残りであることに気づき、戦争中の思い出を皆さんに紹介したいと書きました。

昭和20年6月清明学園の集団疎開児童は静岡県の三島から貨物と軍用の「品鶴線」(現在の横須賀線)で上池上のガードを通り、岩手県雫石まで再疎開しました。終戦後すぐに両親のもとへ帰れず、12月になりやっと列車の手配が付き帰京できました。

その夏、東北地方は冷夏で収穫が少なく、食べ物も分けてもらえず、「笹の実」摘みと「いなご」捕りで飢えをしのぎました。雫石へ行ってから早生まれで、4年生の弟は每晚「おねしょ」をするようになり、臨済寺の庫裏の庭先にある木に敷布団を干されて、「さらし者」になっていました。

帰郷後すぐに清明は再開されましたが、戦時中散り散りになった友人達はほとんど戻らず、各学年10人前後にまで児童数が減少しました。そんな事後に大活躍された雪村いづみさん姉妹が明朗な姿で転校してきたのが印象的でした。

創立者濱野重郎先生は、ご家族一丸となって教育の信念を貫かれ、疎開児童の世話、戦後の苦境期を乗り越えられました。感謝。「世界の手本であり、誇りである平和憲法」が危機に瀕している今、戦争が小さな子供にまで影を落とすことを「弟の夜尿の中に」見ていただければ幸いです。

(東雪 岸田 清美)